

企業家のフィランソロピー活動

— 大原孫三郎の場合 —

The Philanthropical Activities of An Entrepreneur : The Case of President Magosaburo Ohara

(1994年4月8日受理)

大津寄 勝 典
Katsusuke Otsuki

Key words : 企業家, フィランソロピー

はじめに — 企業フィランソロピー

第2次世界大戦後40年を経た1980年代の末頃から、ようやく日本でも企業フィランソロピーの研究が発表されるようになった⁽¹⁾。これはいまや日本の企業活動自体にフィランソロピーがくみこまれるようになったという経済社会的事実が存在する。それは一つに日本が経済大国となり、国富や企業蓄積が高まったことがある。二つに経済成長過程で経済優先の政策がもたらした種々の摩擦、矛盾に対する企業の内省がある。そして三つに先進国の企業として地域共生・文化向上を積極的に意識するようになったことなどがあげられるであろう。平成2年(1990)発行の経済白書は、フィランソロピーという言葉 を初めて使って、企業収益の社会的還元の意味を述べた。

一般には、フィランソロピー (philanthropy) は、博愛、慈善、慈善活動、博愛活動、慈善 [博愛] 事業 [団体] と訳される⁽²⁾。それはギリシャ語の *philos* (愛する) と *anthropos* (人類) を語源とする由である⁽³⁾。類似の言葉でチャリティ (charity) があり、英国にはチャリティ・コミッションすなわち「慈善事業委員会」がある。フランスではメセナ (*mécénat*) という言葉があるが、これは古代ローマの貴族で詩人・文人と親交を結び、その創作活動を支援したマエケナス (*maecenas*・前70年頃—前8年) の名に由来し、そのフランス読みのメセヌ (*mécène*) が、芸術・文化の擁護者を意味するようになった⁽⁴⁾とされている。欧米各国では、フィランソロピーは博愛や慈善から文化向上、社会問題の解決や生活向上のための寄付など公益活動の意味に用いられていることがわかる。

本論では、企業フィランソロピーという用語を使うが、それは企業あるいは企業家による社会貢献・文化活動という意味である。カーネギー、モルガン、ロックフェラーなど古くかつ巨大なフィランソロピストのケースを持つ米国では、1991年企業の寄付は61億ドルで、企業所得の1.95%に相当する⁽⁵⁾。日本では平成元年(1989)(社)経済団体連合会社会貢献部を事務局として、年間所得の最低1%を社会貢献に使うことを約束した「1%クラブ」が発足した。また平成2年(1990)3月には、企業による芸術文化活動を積極的に支援するため民間の「企業メセナ協会⁽⁶⁾」が設立された。芸術・文化に対する国の支援として政府出資500億円、民間寄付100億円計600億円をもとに「芸術文化振興基金」が設けられ、基金の運用益をすぐれた芸術文化活動や地域文化振興活動に助成することになった⁽⁷⁾ものもあ

る。

しかし、フィランソロピーは非政府性民間レベルでの社会貢献・文化支援活動が主であり、かつ寄付行為は非営利的である。寄付のうけ皿であり、活動を実施する専門機関に助成財団があり、また公益信託・共同募金会などの形態もある。助成財団は他の個人・団体が行う研究や事業に対する資金の提供が主なものである。わが国には、現在⁽⁸⁾13,229の財団法人があるが、このうち助成型財団の数は一義的に把握されていない。「助成財団資料センター」の調査によると⁽⁹⁾、助成型財団の数は399、資産合計は8,057億円で、助成額は年間460億円と推計されている。このようにみても、従来経済分析に際し、家計、企業、政府、海外の四部門に分けていたが、ここえて民間非政府非営利（NGO=Non Government Organization）という項目を新設する必要があるであろう。

以上述べて来て、日本の企業フィランソロピーはごく最近に始まったことで、それまでは不毛であったのであろうかの疑問が生ずる。日本企業のフィランソロピーを書いたナンシー・R・ロンドン⁽¹⁰⁾はキリスト教信仰による社会全体への奉仕という理念をもつ西欧と、日本のようにたゞ報恩・感謝の念しかないところとは異なるとみている。アメリカでは政府の行政上の欠陥は、民間の社会貢献によって積極的に補われねばならないという考え方もある。だからと言って、フィランソロピーは欧米に於てのみ行われたとするは正しくない。日本にも戦前から可成り多くの企業フィランソロピストがいた。脇村義太郎が座談会⁽¹¹⁾で述べているが、三菱には岩崎久弥が設立した東洋文庫があるし、岩崎弥之助には清の陸心源の蔵書による静嘉堂文庫の基礎づくりがある。三井では社交の場としてのお茶会があったし、国宝級の茶碗の所蔵もあった。住友吉左衛門は大阪市に図書購入基金を寄付したし、洋画を蒐集して関西美術院をおこした。松方幸次郎が買った近代絵画は、一部が国立西洋美術館に収められているし、大原孫三郎は昭和5年（1930）に、大原美術館を建てている。また高等教育機関をつくった企業家として根津嘉一郎の武蔵高校、平生鈺三郎の甲南高校があるし、藤原銀次郎の藤原工大がある。安田善次郎は東大に安田講堂を寄付しているし、兼松房次郎は一橋大学に講堂を、神戸大学に記念館を寄付している。このほか枚挙にいとまがない。

これらの中にあって、本論では倉敷紡績株式会社（以下「クラボウ」の通称社名を用いる）第2代社長であった大原孫三郎（明治13年・1880—昭和18年・1943、以下「大原」と略す）をとり上げる⁽¹²⁾。その企業フィランソロピーは、期間としては明治、大正から昭和戦前期に及び、活動の場は主に岡山・倉敷という一地方から出発するが、対象領域としては育英教育振興、社会・救済活動、研究・文化創造の多面にわたる点、きわめて特色を有するものである。

大原は明治13年（1880）7月28日、岡山県倉敷村に生れた。この倉敷は江戸幕府の天領として繁栄したところであったが、一方で古くから飢饉など災害に備えて義倉を設けるなど救荒貯蓄の自治があった。中村哲はこのようなことが、のちに社会問題研究所を生む環境要因とみている⁽¹³⁾。祖父壮平、父孝四郎らは村の簡塾森田節斎に学び、謙虚にして堅実に家業の発展をはかった。明治維新の激変をのりこえ、大原の生れた頃、所有耕地は104町歩をこえる地主となった。家業の農業、繰綿、米穀問屋、呉服商に加え金融高利貸なども営んで明治20年には304町歩、そして明治36年には378町歩と土地を集積⁽¹⁴⁾し、大原家は県下屈指の豪家となり、大原が相続した頃は、550町歩をこえる大地主となった。（明治42年）

大原出生の直前に18歳年長の兄が死に、父は46歳。幼年期を自由奔放に育った大原は、小学校こそ卒業したが、形式的な鋳型詰込み教育にはついになじまず、郷学閑谷饗でも、東京専門学校（現早稲田大学）でもいづれも中退した。しかし大原は小学校の板谷節太郎、閑谷饗の西微山、早大の安部磯雄をは

じめ、旧恩師をいつまでも尊敬師事し、また後に知己となる先輩識者に対する礼節と学問尊重の精神が尋常なものでなかったことは忘れられてはならない。

幼少時の山川均、東京時代の森三郎、近所の林源十郎という良き友⁽⁴⁵⁾に恵まれた大原は、社会思想、二宮尊徳報徳教、キリスト聖書などを学んだが、石井十次と接するに及びとくに聖書を忠実に講読した。そして青年時代の思い惑らい、苦悩に一大転機が与えられ、末長く大原の活動を支えるスピリットをこのとき感得する。

大原は天命を自覚した。明治35年（1902）大原は書いた。「日本の敵は英国でなく、ロシアでもない。それはいまの腐敗した宗教、教育と政治である。ここに自分の一生を貫く仕事がある。大原家の財産を神に捧げ、神のために使いつくそう。人のため、世のため、我が財産と一生とを捧げんと決意す⁽⁴⁶⁾」と。生れ育った倉敷を聖倉敷に、「エルサレムにしよう⁽⁴⁷⁾」と。

1 社会教育事業・倉敷日曜講演会（明治30年代）

大原のフィランソピー活動は、明治32年（1899）の奨学金制度にはじまる。大原家では父大原孝四郎の時代から近隣町村の向学心に燃える青年⁽⁴⁸⁾に学資の援助をしてきたが、大原はこれを規則化し、犬養毅・阪谷芳朗など郷土出身のしかるべき人達を審査員として奨学の目的を果すようにした。

明治35年（1902）に入って、大原は小学校の恩師板谷節太郎をはじめ教育関係者と諮り、自ら幹事となって「倉敷教育懇話会」を結成し、町の教育熱を高めることに努めた。また未就学児童の多かった当時、その就学援助のために、財団法人「倉敷奨学会」を設け孝四郎古希記念に1万円の寄付をした。また当時のクラボウでは大半の従業員が未就学であったので、大原は社内に「職工教育部」を設け、さきの倉敷教育懇話会から教師数名を会社の嘱託として、正規の小学校基礎教育と、またキリスト教関係者による精神修養とを施し⁽⁴⁹⁾た。この職工教育部は、全国でもさきがけとなったものであり、後に大原が展開する労働理想主義⁽⁵⁰⁾による企業内教育施設の皮切りとなったものである。

同年には更に町内の男子小学校に夜間の「私立倉敷商業補習学校」を創設し、大原は校長に就任して二宮尊徳夜話や福翁百話を講じた。このほか「婦人講話会」を設け、岡山の山陽英和学校から上代淑子を招き、これを例会化した。

このような社会教育を推しすすめるなか、大原は明治35年12月から「倉敷日曜講演会」を主催した。高等教育機関の存在しなかった一地方の町倉敷に、東京・京都から学識者を招くことは大変なことであった。しかし大正14年（1925）に至る23年間に実に76回開催したし、またこれに関連して「倉敷日曜講演会附属大講演会」が12回、また岡山YMCAに委嘱した「岡山講演会」の18回を合わせると、総計で106回に及んだ。

この日曜講演会については特筆すべきことが二つある。第一は当時の日本を代表する政治家・学者などを講師⁽⁵¹⁾として迎えたことである。そうゆう人物を遠い倉敷へ動員することができたのは、一に教育ということに天命を覚えた大原の熱意のしからしめたところであろう。とくに第60回の10周年記念講演会では早稲田大学総長大隈重信が出講し、「国民教育について」と題して講演したが、総理大臣経験者の来演ということもあり、6,000人も聴集で大変な盛況であった。

第二は、送迎旅費、講演料などの面で大原は講師を格別丁重に遇したのみならず、中には講演会のあと機会を得て歓談するなか自分の社会教育についての考えを語り、教師から見解をひきだして交歓しな

がら、そこで大原は自らの見識を高め、実践に際しての参考とした。これら講師との交流が大原の企業フィランソロピーに大変有用なものとなった。

大原は山路愛山の信濃毎日新聞に寄せた記事（明治35年10月8日）からヒントを得て、自費でこの講演会を維持したのであった。のちに子息大原総一郎が語るよう⁽²²⁾に、まさに「これは父自らが考え、しかもかなり長期にわたって続いた最初の大きな事業であった。」

以上、明治30年代半よりはじまった大原の社会教育事業は、そのこと自体、倉敷とその周辺の人々に対する啓蒙となったことは当然であるが、それとともに大原のその後の企業家活動面で直接間接関係するところとなった。大原奨学生だった児島虎次郎は大原美術館の設立に、神社柳吉はクラブウで、公森太郎は中国銀行で、それぞれ大原の後継社長（頭取）となり近藤萬太郎は農研の所長となった。また日曜講演会の講師として出講した徳富蘇峰は社研の、荒木寅三郎は中央病院・クラレの創設にそれぞれ力を貸し、親身の協力を惜しまなかった。この例は多い。

2 大原農業研究所（大正3年）

大原家は岡山県では、藤田組、野崎武吉郎について大地主であり、その農地には約2550人の小作人が働いていた。小作人が地主に小作米を取めたことは、一般の地主・小作の関係であった。明治末期から大正時代にかけて、小作料問題で、地主と小作人の利害がとくに対立し、急速に社会問題と化していた。

このようなとき、大原は一般の地主とはいささか異なる見解をもっていた。大原自身が小作米の取立てに出たのは明治31年（1898）であったが、36年（1903）以降は自ら農業労働者の姿となって、所有地を検分した。大原はそれまで特別な農業教育をうけたわけではないが、一般の地主が平素拱手して小作米をうけとり、小作料を決めるときだけ小作人と面談するという姿が異なるものにつくり、それは事業に対する無責任かつ恥づべき行為であるとした。何とかして地主と小作人とは相携え、共同して農事発展につくす道はないものか。思索と経験に加え、持ちまへの天稟の職見、聖書や二宮尊徳の報徳記などからうけた洞察から、一つの発想を得てつぎの三つを実行に移した。大原家小作俵米品評会、大原奨農会、そして農民教育。

大原家小作俵米品評会とは、年1回小作米の品質を審査して優秀なものを表彰するという制度で、大原はこれを明治40年（1907）から開始した。この結果よく働き、良い品質の米を多産した小作の小作料を減免するなどの措置をとった。大原家奨農会とは、地主も農業発展のため技術面、資金面で協力しようというもので、農事改良、農業金融、小作者救済、貯蓄奨励、自作農育成などを事業とした。明治41年に東大農科を卒えた近藤萬太郎、ついで小野寺伊勢之助らがこの仕事に参画した。農民教育とは、これら専門家のもと農学校・果樹園・公会堂など総合農民センター⁽²³⁾づくりの構想であった。

大原は明治44年（1910）から近藤らを相ついで農学研究のためドイツに留学させた。このドイツ報告では、農業技術発展のため研究所設置の要を説くものであった。この提案をうけた大原は、従来の大原家奨農会を発展的に解散し、自ら田畑100町歩を寄付して「財団法人大原奨農会」を設け、そこに農業研究所（農研）を置き、農業の科学的研究と農事改良を行うこととした。大正3年（1914）である。

この寄付行為をするに当り、大原はつぎのように語つ⁽²⁴⁾た。— 今年父没後5年、祖父33回忌に当る。父祖の勤勉のお蔭で今日の自分がある。私は本来次男で家を相続すべき者ではないが、兄の不幸により自分が相続するようになった。そこで父祖に対する報恩の記念としてこの寄付をもって財団法人を

つくる。そこには「最も切実な期待をこめて作った（日本で）最初の（民間）研究所⁽²⁵⁾」への思いがある。

農研で特筆すべきは、大原の特別寄付金により大正9年（1920）購入したドイツ・ライプチヒ大学教授プエッファー博士の遺書11,730冊をはじめとする 農業学術文庫であろう。農研では深遠な学理の研究とともにその実際的応用による農業の改良につくした。昭和4年（1929）には、創立15年記念に際し研究事業の拡大強化を意図して、大原は更に100町歩を寄付し「財団法人大原農業研究所」とし、近藤以下の研究員を定めて活動した⁽²⁶⁾。

昭和20年（1945）の終戦、昭和22年（1947）の農地改革による苦難はあったが、岡山大学の開学により、昭和27年（1953）農研はその財産を文部省に無償寄付をして、岡山大学農学部附属大原農業研究所となつ⁽²⁷⁾た。その後同学附属農業生物研究所と改称し、現在では同学資源生物科学研究所⁽²⁸⁾と改組して今日に至っている。

3. 岡山県農会・岡山県協和会（大正8・9年）

岡山県の農会も協和会も、いずれも大原自身が設立したものではない。しかし農会では初の民間人会長をつとめ、協和会も創設にあたって会長に選ばれ、それぞれの面を通じて社会に貢献したので、本論に含ませることに異論はない。

明治政府の地主保護政策により、寄生地主化がすすむ一方で、小作農民の貧困が目立っていた。明治10年代から小作人は団結して地主に対抗するようになり、岡山県でも足守町、矢掛町、船穂村、大井村などをはじめとして小作争議が瀬発し⁽²⁹⁾、大正時代には藤田農場に大争議が発生した。

これに対し、前節で述べた大原の対処は例外的なものであった。大方の地主は土地管理の新会社をつくり⁽³⁰⁾、土地の所有と農業管理とを分離して対処した。地主側は連合して小作料の団体交渉、小作米の収納・共同販売および利益配分にあたった。農業以外に働く口を持たない小作農民は、公課負担も加わり窮乏化した。多くの場合地主は都市に居住して農業の実情を知らず、たゞ小作料の受取りに終始し⁽³¹⁾たので、地主と農民の関係は空虚な対立関係となっていくた。

大原は明治39年（1906）クラボウの第2代社長に就任した年、倉敷町農会会長となり、農民の利益の増進に関心をふかめて来たが、大地主としての責任から自ら農事改良の施策をうち出したことは前節で述べたところである。大原は基本的に農業発展のため地主と小作人の融和共同化を期し、収穫を多くすること、小作料を金納化⁽³²⁾にすることなどの説をもっていた。

大正7年（1918）7月富山県で起った米騒動は全国に広がり、各地で米商人、大地主、高利貸などが焼打ちにあった。8月に入って岡山県でも不穏な動きとなり、倉敷では米価高騰と米の買占めに対する政府や県・町の無策に対し騒動が発生した⁽³³⁾。大原は米の廉売資金として7,500円を町に寄附したり、またその年の凶作による米価高騰を背景として小作に対し特別に2円の配当を施したりしたが、根本的な解決策ではなかった。

本来農民利益の増進をはかり農業の発展を目的とし政府に依存せず独立した活動をする筈の農会が、そのころ十分機能していなかった。農会会長以下全役員が、知事以下県の幹部で占められていた点に反省が加えられ、民間人である大原に会長を要請した。大原は会長就任とともに人事を刷新し、自分の農政経験から、多生産主義、小作料金納化、米穀投売防止を唱導しつつ、大正9年（1920）には県農事研

究会を設立して理事長に就任，農民思想の善導，地主と小作との協調，農業全体の利益擁護，経営・技術の改善などの研究に力を注いだ。

大正11年（1922）には日本農民組合が結成⁽³⁴⁾され，賀川豊彦の「農は国の基であり，農民は国の宝である」から農民と地主の協調が語られ，耕作する者にのみ土地を与えよの農民運動は拡大した。岡山県でも日農の幹部が農民の団結を説き，労働者としての意識を植えつけた。このようなとき，大原は全日本農会を岡山に開催し，大意つぎの見解を述べた⁽³⁵⁾。「今日の農村では，採算のとれなくなった地主が土地を手放し，その結果多くの農民は狭い土地で農業を営んでいる。他方で頑迷な地主は田畑を宝物と見做して手放さない。土地は宝でなく資本である。頑迷な地主の存在する限り小作争議は絶えない。その結果農民は工場労働に走り，農地は大農組織にならざるを得ない」と。

農林省の分離独立もあり，大原の企業面での活動が多忙の度を増した大正14年（1925）9月農会会長を辞任した⁽³⁶⁾。しかし，以降岡山県では，その後も民間人からの会長選出がつついた。

日本の社会史において被差別部落解放運動の中核として「水平社」が創立されたのは大正11年3月であった。しかし，その2年前頃より，岡山県では部落改善を目指す動きがでていた。県の西南にあたる後月郡の有志は「明治天皇は階級を廃し，平等を宣し，穢多解放令を発したが，県下には依然としていまわしい差別がある。この差別撤廃につき方策を講ぜられたい」と陳情した。この陳情団に対し知事は大原と相談することを求めた。この結果，部落問題改善のため大正9年9月に「岡山県協和会」が設立されることとなった。

一部には大原はその会長を受けないであろうとの憶測もあったが，会長就任を懇請されるや，直ちにこれを快諾し⁽³⁷⁾，直ちに全国に率先して部落民の解放運動に活躍した。大正10年（1921）には県事業協会へ10,000円の寄附をして協和会の運動に力を尽した。人間の人格を尊重し，世の弱者・貧しく抑圧されたものを救い，社会を改良しようとする大原の尊い精神を顕にしたものと言えるであろう。

4 岡山孤児院・石井記念愛染園（明治35年・大正7年）

岡山孤児院の主宰者である石井十次を大原が初めて知ったのは，明治32年（1899）10月，孤児院音楽幻灯隊による倉敷伝道集会のときであった。石井の熱情溢れんばかりの弁舌に，いたく感激した19歳の大原は，後日岡山に石井を訪れ⁽³⁸⁾る。林源十郎とともに，その後度々石井を訪れた大原は，キリスト教による孤児救済にかける石井の熱誠に心うたれ，交誼を深めていった。

石井はもともと宮崎県の人。岡山医学校を卒業した翌年，巡礼親子のみじめさからその貧児を救ったが，これが契機となって孤児教育会を設立し，岡山・門田屋敷で事業を開始した。石井はキリスト教の信仰をベースとして，積極的に孤児をひきうけ，のちに孤児院に活版部，米搗部，機械部，理髪部 マッチ部などを設け，孤児の実務習得教育と労働の平行主義を実践した。また院内に小学校を設立し，明治33年（1900）には第1回卒業生8人を送り出した。この間日記を書く用紙にすらこと欠く困窮や，資金難から一同が飢餓に苦しむ危機や，石井自身コレラ感染の苦境を経たが，強い信仰心と不屈の精神力でこれをのりこえた。34年頃からは，伊藤博文はじめ文相，司法相以下の来院視察が相つぎ，明治35年（1902）には石井に藍綬褒章が下賜され，天皇・皇后ならびに皇太子よりそれぞれ下賜金の栄に沿した。

同年大原は孤児院の基本金管理者となって，石井の事業を財政面で支援をした。また院の賛助員が1万人にも達したので，体制を整備して財団法人⁽³⁹⁾化し，大原は評議員として運営に参画した。大原も

明治38年7月受洗⁽⁴⁰⁾してキリスト教徒となり、名実ともに石井を支援した。このことは翌年クラボウの社長に就任してからもこのことは変らなかつた。

明治39年(1906)には凶作地東北に多くの孤児がでて、岡山孤児院は多くを受け入れ救済につとめ一時院児は1,200人にも達した。石井は宮崎県茶臼原に農場を復興したり、大阪に事務所(のちの大阪分院)を開いたり、音楽活動写真班を中国(清)に、事務員をアメリカに派遣するなど精力的に活動した。石井はこの活動を非借金で貫こうとしたが、当座の不足は大原の資力に依存した。茶臼原で開墾、桑園、養蚕などを行い、高崎製糸会社社長にもなった。このような努力のあと石井は腎臓炎をわずらい、視力も衰え、ついに大正3年(1914)1月逝去した。

石井の逝去のあと、大原は一応院長として岡山孤児院の事業を継承するが、そこで冷静に救済事業とは何かを問い、フィランソロピストとしての大きな決断をする。それは慈善的な孤児院を閉鎖し、しかし孤児救済に努めた石井の真の精神を活かした事業化をはかるというものであった。石井という特別の召命者を除いて孤児救済は成立しない。同じく院の評議員の一人折田彦市(旧制第三高等学校校長)も教育経験者の立場から、一般人による孤児教育に難色を示した。解散を決意⁽⁴¹⁾した大原は、岡山孤児院の受けた支援に対し挨拶するため宮内省に出頭したが、全国社会事業協会から反対論がでたり、中には不敬論すらでた。同席した柿原政一郎によると社会局長長沼隆一は「継続を命ずる法律がないのだからやむを得ない」と言放ったという⁽⁴²⁾。

日本における孤児院の総本山とされた岡山孤児院の解散申し立てに対し、世論は孤児の養育は民間の集合教育によるべきではなく、たとえば児童保護法にうらづけられた自治団体が保護救済すべきとの意見に傾いた。解散を決意した12年の後、大正15年(1926)6月、大阪市中央公会堂で岡山孤児院は解散式を挙行した。

さきに述べた「救済に努めた石井の真の精神を活かした事業化」とは何か。それは岡山孤児院大阪分院の事業を孤児院から切り離し、細民の福利を増進するための教育、救護と救済事業を任務とする事業を行うとするものであった。大正5年(1916)3月の岡山孤児院評議員会は、石井没後3年・岡山孤児院30周年の記念事業として大原の5万円寄付を得て大阪に石井記念愛染園、の設立を決めた。「財団法人石井記念愛染園」は⁽⁴³⁾大正6年3月内務・文部両大臣の許可を得、4月設立登記を完了、翌大正7年(1918)1月30日の石井の命日に開園式を挙行した。

石井記念愛染園は、理事に就任した小河滋次郎(当時我が国社会事業界の長老で、大阪府嘱託法学博士)の指導により救済事業を担う職員の養成にあたりるとともに、そのすすめにより新たに救済事業研究室を設置した。そのための関連必要図書を購入して、救済事業の学問的研究をすることを定めた。大原はこのため更に5万円出捐し、毎年1,000円の研究費を寄付することとし、常務理事に就任した。

大原はこの研究室は、きわめて小規模なものであるが、救済事業および社会状態の調査研究に当たると、さらに社会事業を推進する活動家の育成にも努めたいと考え、近い将来これを独立の研究機関として発足せしめたいとのビジョンを公表した⁽⁴⁴⁾。この考え方は、前年に時の大阪府知事大久保利武が根本的な研究部を作るべしと勧誘したものと一致している。このビジョンこそ翌年の大原社会問題研究所の創設に連なるものである。

大正7年(1918)、小河滋次郎が力をつくした方面委員を大阪府は発足せしめた。方面委員とは生活困窮者救護のため、小地域におかれた機関で4年間の名誉職であった。わが国では大阪府ではじめられ

たものをもって嚆矢となすが、昭和11年（1936）に法制化され、戦後には民生委員として社会福祉はすすめられた。この公的動向に愛染園の事業もあって、大正7年は大阪にとって公私共同の福祉政治元年となったと言えるであろう。

昭和12年（1937）には附属愛染橋病院が開院し、昭和27年（1952）には、財団法人より社会福祉法人石井記念愛染園となり、今日に至っている。

5 大原社会問題研究所（大正8年）

大原社会問題研究所（以下「社研」と略す）は、大原のフィランソロピー活動の中で、とくに全国的に有名なものになったものの一つである。それは研究所の所在地を大阪に置いたこと、研究員の多くが東京帝国大学の関係であったこと、そして初代所長の高野岩三郎は、当時の日本を代表する経済学者⁽⁴⁵⁾の一人であり、東大経済学部新設準備委員であったことなどが理由とされている。しかし、何よりも社研が「日本における社会科学のメッカ」⁽⁴⁶⁾となったことを見落してはならない。その設立は大正8年（1919）2月9日、日本における民間初のシンクタンクの誕生である。

大原がこの社研の創設にふみ切った契機に、大正7年（1918）7～8月の米騒動をはじめとする当時の社会事情をあげる人⁽⁴⁷⁾は多い。このこととともに、社研創設に先立つ15～6年間、いままで述べてきたところであるが大原があるいは孤児に、あるいは農民に、あるいは紡績従業員に接し、日本の貧困の救済と社会教育の向上にかけた思索と対策その実践があった。

大原はクラボウの社長に就任する前から社内に教育施設をつくったことは既述したが、就任後直ちに労働環境の改善に革新的具体策を相次で打ち出し、その実践の上に研究を重ねた。社内に「人事研究会」をつくり、紡績業での労務管理のあり方について研究を促した。社会政策学会は第1回大会で工場法をとり上げたが、明治44年には日本で最初の労働保護立法である「工場法」が成立したに関し、これが紡績経営に及ぼす影響について研究を重ねるとともに、労働への影響について深い関心を寄せた。同年来日した英・ウェブ夫妻による救貧は国家的見地からの防貧政策を要すとの見解に啓発された。倉敷日曜講演会に出講した大隈重信、浮田和民らとの関係から、明治45年（1912）6月には早稲田大学に労働問題の調査を委嘱した。大正2年（1913）に石原修の「女工と結核」が発表されるに及び、紡績経営者として黙視しえない重大なテーマがそこにあるとみた。

大正7年（1918）1月石井記念愛染園救済事業研究室が発足したが。そこに集った学者・専門家の討議を通じ、大原は「救済と社会問題とは別⁽⁴⁸⁾」で、いずれも本格的な研究を必要とするものであると認識した。のちに社研の常務理事となり、高野の没後事実上の代表を勤めた久留間鯨造が、東大法学部を卒え社研入所を希望したとき、大原は社研設立への期待をつぎのように述べた⁽⁴⁹⁾。

「自分がかねがね自分の作った財産は息子に残さないで、全部社会的な事業に使ってしまうつもりである。そのためこれまでも多少そういう仕事をしていたが、最近社会問題を政府の都合などに左右されないで、根本的に研究する施設が必要なことを痛感するようになった。今後はいまままでと違って、かなりの決心のもとに社会の研究のために寄付しようと思っている。」

顧みれば、大正6年（1917）にはロシア革命、ドイツ社民党結党など海外からの影響があり、翌年には国内の米騒動をきっかけとして、労働運動、農民運動、普選運動、無産政党運動などが相ついで登場しいわゆる大正デモクラシー「社会的高揚」⁽⁵⁰⁾の時代となった。この社会革新の時代に、よく時勢の

流れを見とおす卓見を備えた大原は、救済的慈善的な社会事業に見切りをつけ、これからの時代に即し、新たな決意をもって、社会問題・救済問題を科学的に掘り下げ、学問的に研究することを痛感したのである。

社研設立の第一の仕事は研究員を集めることであった。大原は秘書の柿原政一郎をともなって、自ら精力的に足を運んだ。かつて倉敷日曜講演会に出講し、岡山孤児院の評議員としても親しい徳富は、最初の頃、社研の設立は時期尚早との見解をもっていたようだが、時代の急速な変化のなかに大原の見解を支持し、京大の河田嗣郎（のちの大阪市大学長）を推した。また貧乏物語を書いて有名となった京大の河上肇は、高野を推した。早大関係からは北沢新次郎を、これまた倉敷日曜講演会講師をつとめた谷本富からは京大の米田庄太郎の推薦を得た。

大正8年（1919）2月、二つの研究所が相ついで発足したとき集った研究スタッフはつぎであった。

9日—社研—河田嗣郎、米田庄太郎、高野岩三郎、久留間鮫造、戸田貞三

13日—救済事業研究所—小河滋次郎、高田慎吾、暉峻義等、大林宗嗣、

研究員は研究所用地として予定された天王寺・伶人町の約1,000坪の敷地を検分した。ここは⁽⁶¹⁾天王寺秋ノ坊と古称され聖徳太子創建以来、貧病者への施薬療養など救済事業の長い伝統をもつ由緒ある寺の所在地であった。

ことあと大正8年9月、高野は国際労働会議代表問題で東大を辞任することとなった。この騒ぎの余韻が残るなか、大正9年1月には東大経済学研究第1巻第1号誌の森戸辰男の論文「クロボトキンの社会思想の研究」が当局の忌諱に触れ、発行人の大内兵衛とともに休職を余儀なくされた。これらを機に、高野、森戸、大内は社研に入った。東大系の研究スタッフが多くなり、京大系が退くということもあつたが、高野は3月正式に社研所長に就任した。

研究活動の第一歩はドイツ・イギリスでの文献収集であり、労働年鑑の刊行であった。大正9年（1920）から15年（1926）にかけて、社研から8人のスタッフが渡欧した。中でも久留間はイギリスを、榎田民蔵と森戸はドイツ文献の収集に努めた。このとき収められた文献は第2次大戦中焼失したり、東京移転時大阪府に譲渡したりしたが、現在も6000冊が残されている。その後購入したものと合わせ、アダム・スミスの『国富論』（初版・2版）、マルサス『人口論』（初版）、リカード『経済学原理』（3版）、ジョン・スチュアート・ミルの『自由論』と『経済学原理』、ペティ『政治算術』などのほかマルクスのサイン入り『資本論』、エンゲルスの署名入り『フランスにおける階級闘争』など貴重な文献に接することが出来る⁽⁶²⁾。

このようにして、社研は先進的社会科学の塔をうち立てることに努めた。そして大正11年（1922）、大原は社研をもって独自の自治機構とする構想をうち出し「財団法人」とした。この財団法人に大原は研究所の土地960坪と建物ならびに書籍の合計28万円強を寄付するとともに、大正13年（1924）から昭和14年（1939）まで毎年経常経費分を寄付し⁽⁶³⁾た。昭和14年は大原がクラブの社長を退任した、企業活動の第一線から引退した年である。

この間、昭和3年（1928）の共産党員検挙（3・15事件）の余波をうけ社研にも捜査が入るという受難があり、その後存廃問題や研究スタッフの死亡などもあつた。昭和12年（1937）には独自経営を建前として東京に移転し、戦後の昭和24年（1949）には法政大学との合併問題が具体化し、現在は同学大原社会問題研究所として学界・社会に裨益する活動をつづけている。また、高野岩三郎はNHK会長に、森戸辰男は広島大学長から文部大臣に、大内兵衛は法政大学総長となって活躍した。

6 倉敷労働科学研究所（大正10年）

大原が紡績経営者として、自分のアイデアを折込んで設置した万寿工場は、機械装置面・労務管理面で革新的な新工場であった（設立大正4年）。大原はこの工場内に、大正10年7月、倉敷労働科学研究所（以下「労研」と略す）を設置した。

クラブウでは、その前年から社内に社会衛生研究部を設けていたが、これは労働に伴う疲労を衛生の面から検討するものであった。また社研では研究の一つに医学的労働研究を置き、この労働医学の担当者が暉峻義等^{てるおかぎとう}であった。暉峻は大正6年（1917）東大医学部を卒業、内務省保健衛生会に入って、東京市内貧民窟で貧乏問題を調べ、社会衛生学のさきがけ的研究に携わっていた。大正8年（1919）大原は遠縁に当たる東大永井潜教授の推薦により、暉峻に社研入りをすすめた。高田慎吾もまた熱心に暉峻の社研入りを求めたのであった。

大正8年（1919）5月、一橋・東京高商の福田徳三は、クラブウの新鋭工場を訪問したが、その際得た所感を論文⁽⁵⁴⁾として発表した。この中で福田は(1)大原が大正4年に設置した万寿工場は、最新鋭の設備と、大原のアイデアによる分散式寄宿舎を導入して、きわめて先進的な紡績工場である。(2)加えて大原は社会問題研究所をつくって、社会問題の学問的研究を支援している。そのような資金の一部を割いて専門家に託し、労働疲労や能率の研究をしてもらいたい。(3)これにより、労働保護の面で有効な施策をうち出すならば、それは国家・社会に貢献する道である。として大原に対し、労働、疲労、能率などの生理学・医学的研究を求めたのであった。

すでに石原修は、紡績資本による女工食いつぶしや、深夜業が人間の息の根をとめるものであり、紡績労働は結核の原因であるとの見解を発表⁽⁵⁵⁾していた。もちろんクラブウの社内では、これに対して否定的な見解⁽⁵⁶⁾を出していたが、大原はこの点について労働医学の観点から専門的な研究の結果と確かな検証を求めた。

当時の紡績経営者は、紡績工場の門を閉ざし、24時間のフル操業の中、夜を日についで生産を強行することに経営の第一義的力点を置いていた。このことはとくに第一次世界大戦の後半から戦後にかけて景気の異常な高まりが綿業ブームの様相を呈した経営環境のもと、当然の措置でもあったろう。つくものはどんどん売られ、先物契約は長期化し、相場は高騰の一途を辿った。紡績会社の業績は爆発的に向上し、株主への10割配当が続出した。史上初の好業績であった。しかしこの中であって労働問題をとり上げる経営者は少なく、中には一顧だにしかなかった。大原が社長でありながら人事課長を兼ね、労働環境の改善・向上に意をつくしたことは全くの例外であった。

社研での会議のあと、八王子の機業女子労働を調査した経験をもつ暉峻に対し、大原はクラブウの工場での現場視察を求めた⁽⁵⁷⁾。その結果如何では、工場を研究のために開放してもよく、また必要ならばそのための研究所を設けてもよいとの意向を示した。

大正9年（1920）4月、暉峻は東大医学部の後輩石川知福^{ともよし}（生理学）とともに万寿工場を訪れ、初めて紡績女工労働の実態にふれた。その年の6月、社研は『日本社会衛生年鑑』第1冊を刊行した。7～8月には桐原稜見^{しげみ}（心理学）を加えた3人のチームを結成し、万寿工場内の女子寄宿舎で、女子工員の昼交替作業による労働の心身機能や疲労に及ぼす影響の実態を予備調査した。大原は工場の実情を研究者に開放するという開明的な面をもちあわせていたが、社会運動の盛んになった当時、調査結果如何によっては、社会運動家の乗ずるところとなり、いたずらな混乱の発生をクラブウの幹部は恐れたので、

予備調査は極秘のうちに行われた。こうゆうこともあり、また工場内の非生産研究施設でもあったので、研究所はごく小規模のものとした⁽⁵⁸⁾。それは150坪木造平家で、生理学、心理学、衛生学、栄養の各研究室に、事務室、図書、会議室、応接室、食堂などを設け、暖房を備え、大正10年（1921）7月竣工した。

暉峻は労研の所長に就任し、労研は「人間生活の産業化、社会組織の産業化に付随して生起する諸種の社会問題、換言すれば近代文化問題の心をなす産業組織についての医学的心理学的研究」を主たるテーマとし、当面は「工場疲労問題」にしぼって研究に入った⁽⁵⁹⁾。

労研の最初の活動は、暉峻をはじめとして、ヨーロッパへ渡り、先進国のこの種の研究機関での研究の調査、研究機器の購入、文献の蒐集などであった。現存するゲッチンゲン科学文庫もこのとき蒐集された貴重な文献である。

労働科学の研究は一方に社会運動家の眼があるし、他面工場法による深夜業撤廃に反対する紡績経営者の反対もあって、労研の研究成果の公表には慎重であった。しかし日本の工場でも女工深夜業の研究がはじまったこと、また当時英米の文献にも決して劣らず科学的な研究であったことを欧米各国にも知ってもらうためにも、研究誌の発刊が望まれた。大正13年（1924）6月には労研の機関誌「労働科学」を発刊した。

深夜作業、女子・若手労働、工場作業場の温湿度問題、作業員の仕事適性検査、集団栄養、従業員採用時の身体検査、その他産業照明、工場体操、作業時間の能率などをテーマとした労研の研究はユニークで世の注目するところとなった。大正15年（1926）には攝政官（のちの昭和天皇）が万寿工場・労研を視察し、後藤新平・宇垣一成・若槻礼次郎・井上準之助ら多くの名士の来場をみた。昭和4年（1929）2月には、産業衛生協議会が労研で開かれ、全国から関係者が多数倉敷に集まり、クラボウ万寿工場内の学校を会場として創立総会を開いた⁽⁶⁰⁾。また昭和5年（1930）11月、天皇陛下岡山へ行幸の際、ご覧になった労研饅頭は労研の開発したパンであるが、栄養学上、経済上からも絶好の主食代用品として全国的⁽⁶¹⁾に歓迎された。今日でも健康食品として松山市などで販売されている。

しかし、昭和初期日本経済が迎えた未曾有の経済的難局に、クラボウも赤字を計上し無配に転落したが（昭和5年度）、この不況対策としてとられた減量経営のため、労研の存立が問われることとなった。産業界全般に合理化が実施され、クラボウの役員会でも再三労研の閉鎖を討議した。ついに労研をクラボウから切り離すこととなったが、大原は労研の研究を擁護し、自分の個人経営に移して、その存続をはかった⁽⁶²⁾。昭和5年7月である。これは大原の大英断があり、フィランソロピーの面目躍如たるものであった。これにより労働科学の研究はつづけられた。労研の多くの研究のうち深夜業の人間の健康に及ぼす害悪の研究は、女子・若手男子従業員の深夜業撤廃に関し重大な警告を提示し、婦人労働に関する科学的研究は、婦人労働問題の核心に迫るもので、母性保護の重大性を指示し、同時に妊婦保護・授乳能力の保護に対し、多くの資料と根拠を提示したのであった。

昭和11年（1936）の2・26事件、翌年の日中事変は世の中騒然となり労研の内部からも今後の在り方について検討を加えた。この結果(1)労働科学の研究は必要で今後とも続けられねばならない。(2)労研は経営体がクラボウから大原個人に移って、かえって研究対象を紡績から一層広げ、かつ自由に研究するようになった。(3)ここで倉敷とか紡績業とかに限らず広く全産業を対象とした労働科学の研究をすることが望ましい。よって労研を東京へ移し、自立経営としたい。

これに対し、大原は東京での自立経営に不安を覚え、倉敷に執着してためらった⁽⁶³⁾。しかし、労働

科学の対象は事実上に無限であった。「暉峻さんの生涯は文字通り前進一路の外何もないという種類のものであった⁽⁶⁴⁾。」幸にして日本学術振興⁽⁶⁵⁾から、労研の東京移転に協力の申し出があり、国家的見地からみて労研の東京移転に大原も同意した。

日本学術振興会は労研の受け皿として、財団法人日本労働科学研究所を設立した。昭和11年8月、大原は労研の研究用諸施設、図書文献ならびに移転経費、そして3年分の人件費・維持費をその財団に寄付した。

昭和11年（1936）10月労研は解散式をあげた。その席上暉峻は大原に対し大意つぎのような謝辞⁽⁶⁶⁾を述べた。— 労研が生れた大正10年の頃の倉敷は、農研こそ存在したが、およそ科学を培う土地としては、極めて肥沃ならざる環境であった。このようなところに労研を設け、あらゆる犠牲と寛容とをもって、責任をひきうけ、科学的研究の自由と義務とを擁護し、研究活動と研究者の生活とを支持した。大原は研究内容について、その実益如何というような一般の経営者の発想はなく、そのような質問は全くなかった。科学的研究機関の真の目的は、窮極のところ科学的研究とその成果を通じて、眼のあいた人間ありのままに事物の形相を正視し洞察しうる人間を培育することが最も大切である。全く大原の卓越した識見により研究機関としての真の使命を果し得た—と、

財団法人日本労働科学研究所は、第二次世界大戦中の苦難のときをのりきった。

そして戦後の昭和20年（1945）11月財団法人労働科学研究所が設立され、現在も川崎市で労働の科学の研究をつづけている。

7 倉紡中央病院（倉敷中央病院）（大正12年）

クラボウでは、大原が経営を担当してより大正時代に入って工場が増え、従業員も1万人を越えるようになった。従来のように各工場の一室で医局と称し、医師と看護婦2～3人の体制で、従業員の治療に当るだけでは不十分となった。ここに大原は健康確保のため、各工場医局の中核機関として各科の診療を備えた倉紡中央病院を設け、病人の治療を唯一の目的とし、病院臭くない東洋一の本格的総合病院とすることを発想した。そして従業員はもとより、その家族、そして将来は一般町民までも利用出来るようにして一般公開を理念とした。「大原はその優秀なる診療技術をもって、社会奉仕の一機関たらしめんとの深遠なる意図をもった⁽⁶⁷⁾。」

この点について大原はつぎのように述べた⁽⁶⁸⁾。「一般公開のことについては、将来工場を社会化させるという意味もあり、殊に紡績職工といへば、社会からまだ異様な目でみられている現在において、わが社が職工を人として、平等の人格を認めて待遇していることを示す一事実と致しまして、ここに開放された病院において、一般人と同じく平等な取扱いをなすことは、可成り意義のあることであると信じます。また先年当地方に感冒が流行した際、庶民階級の人々に対しては医療の方面に甚だ不行届であったことを目撃し、人道上捨て難い大事であると痛感し、一日も早く庶民階級を中心とした病院を設立せねばならぬと考えた次第です。」

下層と見做された労働者も、一般庶民も、何れも等しく人間として、高度の医療福祉の恩恵にあづからしめようとする大原のスピリットをここにみる。

大原は倉敷日曜講演会の講師として出講以来、親交をつづけている京大総長医学博士荒木寅三郎⁽⁶⁹⁾に相談し、各科に京大医学部の指導と協力を得た、院長は辻縁であって、病院は大正12年（1923）6月

に開院した。大原の理念が生かされ、7科83病床をもって、当時日本で有数の施設を持つ病院の一つとなった。

かつて内務大臣や外務大臣などを歴任し、開院直前の大正12年4月まで東京市長であった後藤新平は、30歳台の前半にドイツに医学留学し、帰国して内務省衛生局長の経験があり、日本の医療向上に関心が高かったためか、66歳の高齢にもかかわらず招かれて開院式に来賓⁽⁷⁰⁾として出席、翌日には記念講演を行った。以下は後藤が行った開院式での挨拶⁽⁷¹⁾の要旨である。「自分は大原氏と親交があるわけでも、クラブと特別の関係があるわけでもないが、平素から大原氏が現代生活を諒解し、優れた見識をもってこれを指導している点を承り欣慕の念やまない。着眼よく群を抜き、日本の現代社会に裨益する数々の偉大な仕事をされた。健全な生活を得せしめよう努力する平素の精神が溢れてこの病院となり、工場従業員の健康を保護すると同時に、更に進んでこれを公開しようとする動機は神聖で偉大である。されば千里の道も遠しとせず開院式に臨み祝詞を述べる次第である」と。

開院のあと、その特異な施設の視察に多くの有識者が参観に来院した。その中には若槻礼二郎、床次竹二郎、などがあった。

それでは、大原のフィランソロピーの理念は、病院内従業員にどのように伝わり、うけとめられたか。開院後僅か3ヵ月を経た大正12年9月突如関東大震災が起り、東京・横浜一帯は大変な被害であった。病院業務はまだ諸事軌道に乗っていないときであったが、人間尊重・社会貢献を意識したクラブでは直ちに中央病院中心に救護班を結成し、横浜に派遣することを決め、他にさきがけてそれを実行した。救護班は医師3人、看護婦10人と事務員1人の計14人の編成でクラブ役員を含む幹部3人が同行した。震災被害は各地に及び倉敷―横浜間は、途中神戸―横浜間を海路によらざるを得ず、41時間もかかったが、9月9日より横浜商業や平沼小学校に仮設テントを設け診療に当った。岡山赤十字救済班が来援してくるまでの8日間、延1014人の診療に挺身した。「常ニ肅洒ニシテ清潔ナル我看護婦服ト白足袋、白靴ノ服装ハ、他の救護班ト著シク識別サレ」倉敷中央病院のことが現地の人に感謝されたと社内報告書は述べている。

病院では終始一貫、患者の職業、性別、身分などを平等に取扱い、また職員に対する心付、謝礼、贈物等を一切禁止した。病院内の患者娯楽休憩室には緑と水を備えたスペースが和らぎを与えた。今日でも受けで患者に対し「～さん」でなく「～さま」と呼ぶ⁽⁷²⁾が、ここにも人を尊ぶ姿勢の一端があらわれている。

病院は設立時からクラブという企業名を冠したので、将来社会に公開するとの方針にもかかわらず一般に非公開との誤解を招くおそれもあった。クラブの側には財政事情もあり、病院経営を独立会計に移すという判断もあった。昭和2年(1927)1月より名称を倉敷中央病院とした。その後、昭和初期の不況時、クラブの緊縮政策の中にも、中央病院は理想的医療方針を貫いたが、医業の特殊性から、クラブの本体から分離し財団法人とした。昭和9年11月、クラブは土地(10950坪)建物・医療機器など120万円を寄付して、財団法人倉敷中央病院は新発足した。

戦後になって、創立50周年を期し改修を計画し、昭和48年から約8年の歳月をかけ昭和56年11月、大増設改修工事を完了、これにより病床1103、21科従業員1,260人を医療機器、院内施設あらゆる面で最高の病院となった。

8 大原美術館 (昭和5年)

最近の日本では、企業あるいは企業家による文化貢献として、美術館や企業博物館をつくる動きがある。一点豪華な作品を購入し、それを軸に関連作品を展示する動きがある。また資産価値として、あるいはコレクションに発展して美術館になったようなもの⁽⁷³⁾もある。

ここで述べる大原も等しく企業経営者ではあったが、しかし、最近の動向とはいささか異なるものであった。それは一つに作品の収集の時と方法であり、二つに美術館建設の時である。第一に作品の収集は遠く第一次大戦直後の大正中期から行われたこと、その方法も画商を通じてでの購入ではなく、大原の信頼する日本人画家が自らヨーロッパで現地の画家を直接訪ねて収集したということがある。第二に美術館の建設が、昭和初期の経済大不況の難局昭和5年(1930)であった。このときの大原美術館の設立は、日本では東京・京都・奈良の国立博物館、それから大倉集古館、藤井育成会有隣館などについて古いものであり、かつ西洋近代美術を主体とするものでは、日本で最初のものであることである。

大原は日本伝来の書画の名品を集めた父の感化をうけ、少年時代から掛軸に親しみ、日本古美術に関心をもって育ったが、長じては自ら美術商から熱心に名品を購入し、大正天皇即位の大典美術展に出品するほどとなっていた。また同郷の最高の画聖といわれた雪舟の傑作の入手を志したり、更に近隣の藩主に仕えた浦上玉堂の水墨の山水画に価値を見出し、多くの逸品を集めていた。

このような大原が西洋美術にかかわるようになったのは、一にかかって児島虎次郎との関係である。明治の末頃、岡山県成羽町出身の児島は、繪画製作勉強のため東京美術学校(現東京芸術大学)進学を志し、大原奨学生を希望した。奨学生の多くは経済、法律、教育、工学、農学関係の学問を修めたが、一人児島は美校進学希望であった。大原はこの児島の人間を見抜いたのであろう、奨学生の審査をパスした。明治37年(1904)には、美校本科を卒業し、専科に進んだ⁽⁷⁴⁾。明治40年には大原の紹介で訪れていた石井の岡山孤児院に入り、「なさけの庭」と郷里成羽で「里の水車」の絵をかいた。翌年の東京勸業博覧会で「なさけの庭」が皇后の目にとまり、宮内省買上となり、また「里の水車」は一等賞となった。これに大変喜んだのは大原で、児島に欧州留学を許した。児島は明治41年1月パリに向けて出発、存分の勉強をし、明治45年パリ留学から帰国した児島は画風に変化と一段の成長をみせていた。大原は、ますますその人物と画才を愛し、ついには心の友となって石井十次の娘友子と児島の縁を結んだり、倉敷郊外の別荘を与えて、そこをアトリエとして児島は画筆に親しんだ。

大原は児島が、このまゝ一倉敷の画家にとどまらず、更に成長することを願い、再度の渡欧をすすめた。第一次世界大戦後の大正8年(1919)、児島は東京(美校)、大阪(公会堂)で個展を開いたあと渡欧するが、このときかねてからの宿願を大原に申し出た。「前回の留学中に欧州各地の大小都市にある美術館や博物館を訪れたが、それがどれだけ多くの刺激と研究資料を提供してくれたか。そのことを思うにつけても、わが国においてはいまだそのような恩恵をうけるべき施設は少ない。洋画家が本格的な洋画をみる機会は皆無に等しい。このような現状に鑑み、若い学徒のためにも、せめて療爛と咲き乱れているフランス現代繪画の代表的な作品数点だけでも購入して持ち帰りたい⁽⁷⁵⁾。」平素より文化の向上に熱意を持つ大原は、その繪画の鑑賞を通じて多くの人々の社会教育にもなると考え、この児島の申出を快諾したのであった。

約2年間、児島はヨーロッパで、研究と代品収集に専念した⁽⁷⁶⁾。アマンジャンに師事し、心血を注いで画作につとめる一方で、フランスの代表画家を自らの足で訪れ、作品の譲渡を求めた。自分の作品

を売らないことにしていたモネは、児島の熱意に動かされ、日本の牡丹の木と交換を口実に「睡蓮」を渡した。老齡のコツテから数々の作品を、カトリック信者で簡素な生活の中に、自分の繪の市価も知らないテヴァリエールから傑作を入手した。新旧両作を求めたマティスからは、結局新作「画家の娘（マティス嬢の肖像）」を譲りうけた。これはマティスが書き、愛嬢の部屋に掲げていた肖像画で、この繪を手放すときマティスは惜別の涙を流したと伝えられる⁽⁷⁷⁾。このように努めたあと、児島は現代フランスの代表作25点を収集し、大正10年（1921）初冬に帰国した。

大原の意向をうけ児島の帰国を待っていたのは、林桂二郎らクラボウの大学出身の若手社員が結成していた「倉敷文化協会」の連中であつた。協会はその年の3月、倉敷の小学校で「第1回現代フランス名画作品展」を主催したところ、フランスの新鮮で優雅、そして豪放な画風の作品を、自由に一堂で鑑賞することが出来るというので、東京、京阪神はじめ各地から多数の人々が観賞に訪れ、翌年の第2回でも盛況で、倉敷の町は一躍全国的に有名な芸術色豊かな雰囲気となった。

この小成に安んずるような大原ではなかつた。plus ultra という言葉がある。何事も最高を極めるまで徹底を期さんと、大原は当時の社会・人々がこれほどまで西洋繪画を渴望するのであるなら、日本の文化向上のためにも、もう少し収集すべきであると判断し、児島に三度目の渡欧を求めた。大正11年（1922）3月であつた。第一次世界大戦後のヨーロッパは生活窮乏のため秘蔵の名画を手放す人もあり、また円為替は有利な相場であつた。渡欧した児島はフランスのみならず、ドイツ・ベルギー・イタリア・スイスからスペインの諸国まで行動範囲を広げた。パリではエル・グレコの「受胎告知」を、ベルリンではバーゼルの貴族所有のセガンチーニの「アルプスの真昼」を購入した。このほかミレ、シャンパンヌ、モローの作品40余点を収集し、翌年5月帰国した。倉敷では8月に第3回の展覧会を開催し、前回同様大変好評であつた。この機会に文化講演会を開催し、当時27歳の河井寛次郎が「エジプト古陶器の話」と題して出講した。これが後年、大原が民芸へ関心を寄せる契機となつた。

大正から昭和へ移る頃、児島は西洋美術を公開し、その展覧会開催につとめた。フランス政府は大原と児島に対し、美術功勞を表彰する勲章（ル・シュバリエール・ヅ・オールドス・ナショナル・ド・ラ・レジョン・ドノール）を授与した。

昭和2年（1927）には、児島は東京・明治神宮繪画館壁面に「対露宣戦布告御前会議」を揮毫することとなつたが、大原との間で、収集した作品を恒久的に展示する施設として美術館を建設することに對して話をはじめた。この途次で児島は突然脳出血で倒れ、一時小康をみたが、昭和4年（1929）3月8日死亡した。大原はその友人葬で「君の如く真面目にまた熱心に僕に対し衷心からつくしてくれたものはいない。君は僕が本当に心から信じていた友人の一人であつた」と声涙下る告別の辞で児島を葬送した。

その3カ月のちの6月、大原は倉敷に児島の美校時代の恩師藤島武二ならびに、児島の先輩・友人の画家満谷国四郎、太田喜二郎、吉田苞を招き、児島の遺志を継ぎ児島画伯記念美術館をアトリエのあつた倉敷郊外酒津に建てることを相談した⁽⁷⁸⁾。世は不況の最中であつたが、一同は大原のこの決意に敬意を表した。親友吉田苞は死後の児島に代つて「対露宣戦布告御前会議」を仕上げることにした。大原はこれを支援した。

美術館の設計は薬師寺主計に依頼した。薬師寺は東大卒の陸軍建築技師、勅任官まで昇任したが、クラレ創設時、取締役として入社した人で、このとき常務であつた。もともと大原奨学生でもあつた。薬師寺は児島の意にかなうことを念頭に、大原に美術館設計案を提出した⁽⁷⁹⁾。ギリシャ神殿のイメージ

した正面のデザイン、ギリシャ建築様式の一つであるイオニア式の柱頭を持った二本の長い円柱、軒蛇腹の装飾を施した三角破風の尾根……

周囲の意見は、美術館の場所は郊外より、大原家の新溪園のところ（現在地）がよく、名称は大原美術館としたいとすることであった。大原はこれにより大原美術館と名称を定めた。工事は着々進行し⁽⁸⁰⁾、美術館の大玄関の両側にはロダンの名作「洗礼者ヨハネ」及び「カレーの市民」の像を据え、階下には児島の「里の水車」から近作の「朝鮮の婦人」に至る105点の遺作を年代順に陳列した。階上には児島が蒐集した大原コレクションの西洋名画61点を掲げた。中でもアマンジャンの「ヴェニスの祭」、エル・グレコの「受胎告知」をはじめ名作が高貴な芸術の香を放った。別室にはこれまた児島が蒐集したエジプト古美術品、ペルシャ、エジプト、トルコ、中国などの古陶器・銅器を陳列した。

昭和5年（1930）11月5日大原美術館は開館した。この開館式で大原の挨拶につづき、原澄治がつぎの設立趣意書を代読して児島を追憶した。「私がこの度小規模ながら美術館を建設致しましたのは、昨年亡くなりました児島虎次郎君を記念するために同君の作品及び同君が生前渡欧の上、心血を注いで蒐集致しました泰西画家の作品、並びに古代エジプトの古芸術品、或は外部の古陶器類を陳列する目的であります。いささかなりとも、同君の仕事が斯道に志す人達、或は一般愛好者のお役に立てば仕合わせと思えます。—（以下略）—⁽⁸¹⁾」

このように大原美術館の設立をみると、そこに大原の児島との厚い友情をベースに、その上に立つ社会教育への熱意・文化向上への努力のあとをくみとることが出来るであろう。このことは、まさにフィランソピー精神にほかならない。

もう一つつけ加える。大原美術館設立の年、昭和5年（1930）は、大原にとって公私両面にきわめて多難な頃であった。その経営するクラブは創立50年にして迎えた創業来初の赤字無配に転落、不況対策としてとられた緊縮経営に対するストライキ抗争があった。またクラレ・中国銀行いずれも創業の苦難のときにあった。さらに私的には自身の病氣入院、親類、心友の逝去があり、夫人の入院・逝去が重なった。まことに難事踵を接して到来する中、この行為を敢行したことを忘れてはならない。

大原美術館は今日でこそ年間100万人に達する参観者で溢れているが、設立から戦中にかけて、或は終戦直後には、訪う人の少ない時代であった。美術館日誌⁽⁸²⁾には「本日來訪者なし」がつづいた。また大原美術館をめぐる、地方史家や関係者⁽⁸³⁾の間に、国際連盟リットン調査団員がこのような優れた文化財を持っているので日本の印象を改めたというエピソードがある。しかしこの通説は改めて検証されることを要すると考える。

大原美術館は、昭和10年1月財団法人となった。その設立者は大原と児島の嗣子児島越一郎であった。大原の没後、理事長は嗣子大原總一郎、ついで田中敦（クラブ第8代社長）が担い、現在は大原の孫大原謙一郎理事長、藤田慎一郎館長の時代となっている。

む す び

以上述べてきた大原による企業フィランソピーをまとめてみたい。一部に倉敷日曜講演会、大原奨学金制度、岡山孤児院や倉敷での数種の社会教育のように、今日すでにその使命を終えたものもあり、また早稲田大学、同志社大学、山陽学園や旧制第六高等学校などに対する寄附・寄贈など無形のものも

あった。しかし多くは、60年以上を越える現在も存在し、組織の変更はあったがそれぞれの立場から大原の理念を活かしつつ有意義な活動がつづけられている。

東京や川崎に移った社研・労研は、一地域一業種に限らず、全般的な社会問題・労働科学に鋭い研究をつづけているし、大阪では愛染園が病院活動を併置して活躍している。発祥の地倉敷では農研・中央病院、大原美術館が、それぞれ時代に適応した変容をはかりつつ、立派に地域の発展に大きな役割を果たしている。このほか本論では直接述べなかったが、倉敷商工会議所、国鉄伯備線誘致、幼稚園若竹の園の設置などあり大原のフィランソロピーは盡きない。また東京・日本民芸館のことも見落せないであろう。

かつて青地辰は⁽⁸⁴⁾、このような大原の社会・文化事業をつぎの五つに分類して考えた。1. キリスト教信仰による慈善救貧の事業（岡山孤児院・愛染園）2. 郷土愛の発想（日曜講演会・中央病院）3. 福利厚生改善向上（クラボウの寄宿舎）4. 研究機関の設立（農研・社研・労研）5. 美術品の収集・公開（美術館）—これをみるに、はじめはキリスト教による救世の熱情が沸騰しているのだが、次第に星雲状態から脱して、組織的・科学的な方向をととのえた。

大原のフィランソロピーを慈善的なものから科学的なものへの変化の中にとらえることは大切である。そして戦前・戦後という激変の中を、しかも半世紀を越えた今日までも、多くの機関が存立を主張し世に裨益するところ大なる理由はそこにある。このことを念頭に置いて、最後に大原のフィランソロピーの底流にあった理念を以下に4点述べたい。

第1点は、すべての実践の根底に人間愛の発想があったことである。人間尊重をたゞ抽象的に謳うのではなく、自身が関係した孤児貧児、小作農民、紡績労働者など、いわゆる下層といわれた人達に対し、それらを商品のように使えるだけ酷使するという当時一般の発想ではなく、その人格を認め、救済と向上のための人道主義を旗印に、敢然と私財を思い切って投入したことである。寄付行為に当っては、大原家の財産を子孫に残さない覚悟でそれを実施した。

第2点は、大原の深層心理の中には、常にキリスト教聖書と二宮尊徳報徳教とがあり、西洋の倫理と東洋の道徳とが巧みに融合しているのを見る。たゞ人情的な側面だけでなく、合理的な局面が兼ね備わっていたように思える。また具体的な展開にあたっては、地主と農民の調和、資本家と労働者の調和、この両者の共同作業の上に、農業、工業の生成・発展、社会文化の向上を期した。

第3点は、実践にあたっては、必ずその道の専門家、あるいは日本を代表する当代第一流の人物に見解を質し、その頭脳をひきだし、学問の成果・その指さすところを見究めた。従って労働科学とか社会問題という言葉がまだあまり使われてなく、或は危険なものとしてされていた当時にも、しかしそれが学問的に本格的なものである以上、その採用をためらわなかった。一般にはそれが先見性とも独創性ともみられるところであったが、しかしそれは基本を外さない理想であったのである。人間関係の長く深い信頼の上に、フィランソロピーは実現した。あの石井十次に対する信頼、児島虎次郎との心の交わりなど、枚挙にいとまがない。事業を委嘱した人を最後の最後まで信頼し、時代環境の変化を越えて、事業成立のため支え援けつづけたのである。

第4点事業はいずれも、当初、大原の社会貢献の理念からスタートした。そしてやがては、それを一般に認められた財団法人化し、独立の経営体として、自主的な運営をすすめた。

私は大原のフィランソロピーを述べて来て、そこにある人格主義、総合の美、学問的理想の高揚、人間関係の絆、そして独立経営などを見出す。

大原孫三郎は、昭和11年（1936）ロンドンに居住する息子大原總一郎夫妻にあてつぎを書き送った⁽⁸⁵⁾。「人間そのものがその人のすべての財産である。その他のものは幸いするものではなくて、反って禍するのである。人間に生まれてきた以上、真の人間たるよう努力すること、いわゆる修養すること、生きる意義があるよう各自の自覚を要する。」

「万物、皆師の心得が必要である。自己を信ずる個性の拡張や訂正も大切であるが、積極的にすべてにブツカッて、而して発見、発明があるので、苦難苦勞の内より幸福が生れ、光明が与えられるものである。いわゆる安全の道は進歩も工夫もないのである。」と。

以 上

〔脚 注〕

- (1) 川添登・山岡義典（編）『日本の企業家と社会文化事業 — 大正期のフィランソロピー』（東洋経済新報社・1987）が、私の知る限り、フィランソロピーという言葉を標題とした最初の研究文献である。
- (2) 研究社『新英和辞典』（第5版） 1586ページ
- (3) 本間正明（編）『フィランソロピーの社会経済学』（東洋経済新報社・1993）15ページ
- (4) 電通総研（編）『企業の社会貢献』^{フィランソロピー}（日本経済新聞社・1991）37ページ
- (5) 本間正明（編）前掲書 67ページ
- (6) 「企業メセナ協会」文化庁所管の社団法人、会長鈴木治雄、正会員179社のほか文化団体、地方自治体など37の準会員、（平成4年現在）。〈[社] 企業メセナ協議会（編）『メセナ白書1993』（ダイヤモンド社・1993）307ページによる〉
- (7) [財] 公益法人協会（編）『日本の企業財団'92』（財）公益法人協会・1992）41ページ
- (8) 総理府調査・1992年10月
- (9) [財] 助成財団資料センター『助成団体要覧』（第一法規出版・1993）16ページ
- (10) ナンシー・R・ロンドン、平山真一（訳）『日本企業のフィランソロピー — アメリカ人が見た日本の社会貢献』（ティビーエス・ブリタニカ、1992）第2章
- (11) 脇村義太郎・鈴木治雄・由井常彦「文化の支援者としての企業家」（日本経営史研究所『経営と歴史』1991年12月号）2-19ページ
- (12) 大原孫三郎の企業者活動そのものについては、つぎを参照されたい。拙稿「大原孫三郎の企業者活動と経営理念」（『経営史学』・東京大学出版会・1991年4月号）。拙稿『経営発展と企業者活動』（大学教育出版・1993年）第8章・第9章
- (13) 中村哲「幕末倉敷知識人たち — 大原社会問題研究所の夜明け前 —」＝法政大学大原社会問題研究所『資料室報』173号（1961年3月）中村哲『わが学芸の先人たち』（法政大学出版局・1978）
- (14) 安良城盛昭「土地集積過程」、中村政則「資金運用形態」＝東京大学社会科学研究所編『倉敷紡績の資本蓄積と大原家の土地所有・第1部』（東京大学社会科学研究所・1970）139-172ページ
- (15) 犬飼亀三郎『大原孫三郎と原澄治』（前掲）9ページ
- (16) 『大原孫三郎伝』（大原孫三郎伝刊行会・中央公論事業出版 1983年）40-42ページ
- (17) 『大原孫三郎伝』（前掲）55-56ページ
- (18) 奨学生の名前はプライバシーの関係で個々には公表しないが、この奨学金を利用して、進学した

学校はつぎである。(明治33年より42年の卒業生。東大工学部・東大法学部・京大法学部，東京高師各4，東京高商・東大文学部・東大農学部，東京美校各2，東大医学部・京大医学部・早大政治学部・岡山医専・盛岡農専各1 — 計29人) 『大原孫三郎伝・草稿』(大原孫三郎伝刊行会未公刊) 170ページ

- (19) 倉敷紡績株式会社『回顧六十五年』(内外印刷・1953年) 99ページ。同『倉敷紡績百年史』(凸版印刷・1988年) 70ページ
- (20) 拙稿「大原孫三郎の企業者活動と経営理念」(前掲) 15ページ以下。拙稿『経営発展と企業者活動』(前掲) 第9章，132～151ページ
- (21) 主な講演者名は徳富猪一郎，新渡戸稲造，山路愛山，荒木寅三郎，大隈重信，安部磯雄，永井潜，桑木巖翼，など。(『大原孫三郎伝』53ページ)
- (22) 『大原總一郎随想全集1』(福武書店・1981年) 78ページ
- (23) 『大原孫三郎伝』(大原孫三郎伝刊行会・1983年) 90ページ
- (24) 『大原孫三郎伝・草稿』(前掲) 333ページ
- (25) 『大原總一郎随想全集1』(前掲) 84ページ。括弧内は筆者が記入した。
- (26) 財団法人大原奨農会刊『財団法人大原農業研究所史』(1961年)
- (27) 『岡山大学20年史』507～508ページ，昭和27年岡山大学に移管時の蔵書は114,430冊で，総額12億円と見積られた。(『財団法人大原農業研究所史』45～48ページ)
- (28) 岡山大学40年史編纂委員会『岡山大学史・昭和54年～平成2年』58ページ
- (29) 谷口澄夫『岡山県の歴史』(山川出版社1982年—2版) 192～198ページ
- (30) 柴田一，太田健一『岡山県の百年・県民百年史』(山川出版社・1986年) 186ページ
- (31) 中村政則『労働者と農民』(『日本の歴史・29』・小学館・1976年) 28ページ。中村は山梨県の例をあげているが，岡山県でも同じ。
- (32) 小作料金納化説 — 大正2年7月17日三重県地主懇談会で発表した。
- (33) 大正7年8月19日まで，岡山県下で19の町村に襲撃事件があり，倉敷町では12人が起訴された(『図説岡山県の歴史』(河出書房新社1990年) 254ページ。なお坂本忠次『大正デモクラシー期の経済社会運動 — 岡山県地域を中心に —』(御茶の水書房・1990年) 第3章を参照)
- (34) 今井清一『大正デモクラシー』(『日本の歴史・23』・中央公論社1992年・21版) 318ページ
- (35) 『大原孫三郎伝・草稿』(前掲) 629～630ページ
- (36) 大原は農会会長辞任にあたり，経費の補助を目的として農会に17,000円を寄附した。これについて大原が在任中会長手当として受取ったものを全額返上したという説がある。 — (犬飼亀三郎・前掲書38～39ページ)
- (37) 『大原孫三郎伝・草稿』(前掲) 635ページ
- (38) 大原の石井訪問日は，大原の日記によれば10月17日。しかし，この日の石井の日記には大原来訪のことは書かれていない。石井の日記に大原のことが出てくるのは11月19日から。
石井十次，慶応元年(1865)宮崎県に出生。17歳のとき岡山甲種医学校に入学，明治17年(1884)岡山キリスト協会金森通倫牧師から洗礼をうく，明治19年岡山甲種医学校卒。
- (39) 岡山孤児院寄付行為許可(明治36年1月17日) = 柴田善守『石井十次の生涯と思想』(春秋社・1964年) 122ページ

- (40) 大原のキリスト教受洗。明治38年7月31日、溝手文太郎牧師、耶蘇教倉敷講義所（現日本キリスト教団倉敷教会）。『倉敷基督教會略史』（1935年）34ページ
- (41) 柴田善守、前掲書229ページ
- (42) 柴田善守、前掲書254ページ
- (43) 財団法人石井記念愛染園寄付行為（大正6年4月2日）＝『石井記念愛染園80年史』（1992年）78ページ。愛染の名について、—愛染橋保育所の場所は、前に高津入掘河を控え、更に一帯の貧民街を超えて天王寺に続く高台に接し、ここには有名な愛染明王が祀られている。向うの町とこちらの町とを接続させているのが、その仏に因んだ愛染橋で、保育所はその橋詰に設けられている。愛染とは保育事業に最も趣味ある名である。（明治43年岡山孤児院年報より — 石井記念愛染園80年史46ページ）
- (44) 『石井記念愛染園80年史』87ページ・87ページ。大島清『高野岩三郎伝』（岩波書店・1968年）208ページ
- (45) 明治時代末期から大正期にかけて、日本を代表する経済学者としてはつぎの三人があげられる。河上肇（京大）、福田徳三（一橋）、高野岩三郎（東大）。
- (46) 大内兵衛『大原孫三郎・偉大なる財界人』（第11回全国統計大会事務局・1961年）18ページ以下
- (47) 三島康雄「大正・昭和前期の経営」＝作道洋太郎・三島康雄・安岡重明・井上洋一郎『日本経済史』（ミネルヴァ書房・1989年・11刷）176ページ
- (48) クラボウ社内報『倉敷時報』（大正8年5月1日）2ページ
- (49) 『大原孫三郎伝』（前掲）134ページ
- (50) 森戸辰男「労働科学50周年を迎えて」＝『労働科学の生い立ち』（労働科学研究所、1981年）2ページ
- (51) 土屋喬雄『続日本経済理念史』（日本経済新聞社・1972年・3版）382ページ
- (52) 法政大学大原社会問題研究所『大原社会問題研究所雑誌』363・364号（法政大学出版局・1989年2月・3月）49ページ以下、とくに71、72ページ
- (53) 大原による社研への経費寄付（年間）、昭和9年まで85,000円、以降65,000円
- (54) 福田徳三「経済生活改造途上の一福音 — 労働非貨物主義の公認 —」（『改造』1919年7月）12ページ
- (55) 石原修「女工の衛生学的視察」（『国家医学会雑誌』322号、1913年11月）
- (56) クラボウ社内報『倉敷月報』（大正6年5月15日）6ページ
- (57) 倉敷紡績株式会社『回顧六十五年』（前掲）225ページ、労働科学研究所『労働科学研究所60年史 話創立60周年記念』（1981年）29ページ。三浦豊彦『暉峻義等』（リプロポート・1991年）100ページ
- (58) 倉敷紡績株式会社『回顧六十五年』（前掲）225ページ
- (59) 労研誕生時の研究員、暉峻義等（明治22年生）東大医学部、石川知福（明治24年生）東大医学部卒、八木高次（明治25年生）東大医学部卒北里研究所を経て入所、桐原葆見（明治25年生）東大文学部卒。
- (60) 労働科学研究所『労働科学研究所60年史話』（前掲）73ページ
- (61) 労研饅頭指定者組合『労研饅頭 別名 労饅』（竹内成一・1936）によると、昭和11年当時の労研饅

頭指定者は全国31市町村に37社あった。

- (62) 労働科学研究所『労働科学研究所60年史話』（前掲）88ページ，倉敷紡績株式会社『回顧65年』（前掲）228ページ
- (63) 労働科学研究所『労働科学研究所60年史話』（前掲）89ページ
- (64) 大原總一郎「暉峻さんの思い出」=『大原總一郎随想全集1』（前掲）138ページ
- (65) 日本学術振興会，会長財部彪（海軍大将）
- (66) 倉敷紡績株式会社『回顧六十五年』（前掲）237ページ
- (67) 本多操「序言」=『倉敷中央病院誌・創立十周年記念』（1933年5月）1ページ
- (68) 倉敷紡績株式会社『回顧六十五年』（前掲）241ページ
- (69) 荒木寅三郎の倉敷日曜講演会出講，「醗酵素について」明治38年7月9日
- (70) 当日の主な来賓，後藤新平子爵，石黒忠恵子爵，，京大総長荒木寅三郎，同医学部長島蘭順次郎長岡山・佐々木香川両県知事ほか。
- (71) 倉敷紡績株式会社『回顧六十五年』（前掲）244ページ
- (72) 城山三郎「わしの眼は十年先が見える・大原孫三郎の生涯」=『小説新潮』（1993年1月号）40ページ
- (73) 株式会社ヴィジュアルメッセージ社『企業の文化戦略』（1990年）8ページ
- (74) 児島直平『児島虎次郎略伝』（児島虎次郎伝記編纂室・1967年）26ページ
- (75) 『大原孫三郎伝・草稿』（前掲）611ページ
- (76) 藤田慎一郎『大原美術館西洋の繪画』（山陽新聞社・1989年—第4刷）22ページ
- (77) 『大原孫三郎伝・草稿』（前掲）612ページ
- (78) 『大原孫三郎伝・草稿』（前掲）883ページ。藤島武二については山陽新聞社編『夢かける大原美術館の軌跡』（1991年）132ページによる。
- (79) 山陽新聞社編『夢かける大原美術館の軌跡』（前掲）137ページ
- (80) 『大原孫三郎伝・草稿』（前掲）959ページ
- (81) クラブオウ社内報『倉敷時報』（昭和5年11月15日）2ページ，当時の漢字のまま。
- (82) 大原美術館日誌
- (83) 大原總一郎「敬堂十話」（『毎日新聞』1953年10月10—22日）=『大原總一郎随想全集第4巻』（福武書店1981）88—89ページ，ほか。
- (84) 青地晨「倉敷王国大原三代」=『中央公論』（1971年4月号）270—271ページ
- (85) 大原總一郎「理想と敗北とのたたかい — おやじ，大原孫三郎の一面 —」=『大原總一郎随想全集第1巻』（福武書店・1981年）95ページ

（完）